平成12年度筑波大学附属図書館開館日カレンダー

10月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

11月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

12月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

1月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	29	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

2月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
28	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

3月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

無印　中央・体芸・医学９：00～22：00　大塚13：00～21：10
中央・体芸・医学９：00～22：00　大塚９：00～17：00
中央・体芸・大塚９：00～17：00　医学９：00～20：00
緑　中央・体芸・医学13：00～18：00　大塚13：00～19：50
中央・体芸・医学13：00～18：00　大塚 休館
中央・医学13：00～18：00　体芸・大塚 休館
４館とも休館
筑波地区休館（10月21，22日は停電のため）大塚９：00～17：00
※ 臨時休館等の場合は掲示でお知らせします。

私の一冊

宮永　豊

『目で見るスポーツ外傷と障害』（全５巻）

宮永　豊監修（医学映像教育センター）

〔体芸 視聴覚 789.19-Me14-1/5〕

日頃，スポーツ外傷と障害に関する講義や講演をしていて，書籍・雑誌などのスタティックなものの助けだけではスポーツ関係者はもとより学生・大学院生の理解が十分には得られていないことを実感していたので，今回『目で見るスポーツ外傷と障害』を刊行することにした。タイトルからもわかるように，知識や情報の伝達手段をビジュアルで，ダイナミックなイメージが描けるビデオにしたのが大きな特徴である。

内容的にはスポーツ外傷と障害の基礎から臨床

すぐに役立つ実践的な知識や情報が盛り込まれている。このような広範な内容を興味深く頭に入れてもらうために平易な解説，図表やダイナミックな映像，最新のコンピュータグラフィック技術を存分に取り入れるなどの工夫が施してある。スポーツ界，学会で活躍している本学と東大の教官の協力を得て，それぞれ専門的な立場から編集した。

このシリーズは５巻より構成されている。第１巻『運動器のしくみと動き』では，とかく難解な外傷や障害のバイオメカニクスと関節運動をダイナミックな映像で解りやすくした。第２巻『スポーツ外傷と応急処置』は外傷の解説･対処方法，第３巻『主なスポーツ障害』は代表的スポーツである野球，ランナー，サッカーに好発する成長期のスポーツ障害を詳述した。第４巻『アスレティックリハビリテーション』と，第５巻『テーピングとマッサージ』は概要を明らかにし具体的な方法，手技が手にとるように解るようになっている。

スポーツ外傷と障害のような医科学的テーマは大変ビデオにしにくいものであっただけに，本ビデオは画期的なものである。読者の理解を助け，スポーツ外傷と障害の全てを明らかにしている。好きな時に，好きな所を見るといった利用もできるので，大いに活用してもらいたい。

（みやなが・ゆたか　体育科学系教授）

立川孝一
「フランス革命 祭典の図像学」（中公新書933）

立川孝一著（中央公論社）〔中央　235.06-Ta14〕

図書館の歴史コーナーに立ち寄ったところ，古今の名著・大著の間に，この新書版の１冊が心細げにはさまっていた。仲間を増やしてやろうと一冊進呈したのがヤブヘビで，自著を語るの仕儀となった。

奥付を見れば1989年７月刊。フランス革命200周年の企画のひとつとして本書は世に出た。ぼくはその前年にも『フランス革命と祭り』（筑摩書房）を出版していたが，こちらの方はプロヴァンス大学に提出した学位論文の簡約版のようなもので，舞台は勝手の知った南仏の小都市，処女作ではあったが楽しい仕事であった。だが，視点をパリに移し，革命をその全体像において捉えようとした二作目（本書）は思うように筆が運ばず，「200周年に間に合わない」と出版社は気をもんだ。

学術論文であれば，データが揃った所で確実と思えることだけを書けばよい。だが新書のような一般向けの本では，歴史の全体像をはっきりと示すことが要求される。つまり，フランス革命をあの時点（1989年という現在）において，何故，どのように評価すべきなのかという問いに対して著者の立場を鮮明にすることが求められていたのである。だが，旗幟鮮明たらんと欲すれば支配的学説に異を唱え，恩師の不興を買うことだってある。

とにかく，フランス革命を教科書にあるような近代的な市民革命として描くつもりはなかった。議会制，人権，市場経済などはアングロ・サクソンのスローガンにすぎない。フランス革命の最大の特徴は近代化に対する抵抗――伝統を守ろうとする農民とサンキュロットの自発的抵抗にあった。そして彼らの反乱を可能にさせた平等の意識と社会的結束力こそ，現代人が見失ってしまった理想――フラテルニテ（友愛）――の意味なのだと今でも思っている。

（たちかわ・こういち　歴史・人類学系助教授）